“あのころ”のまてりあ

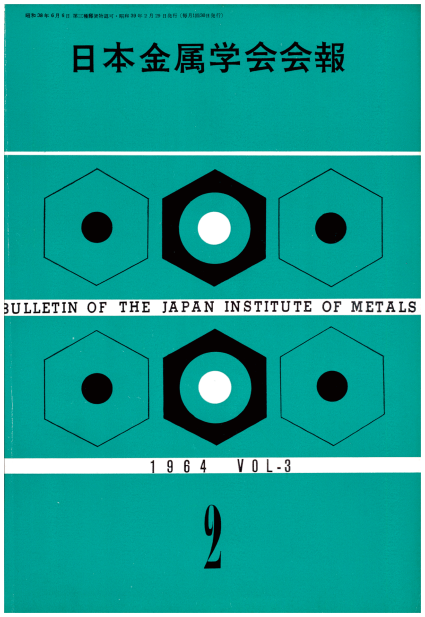
『日本金属学会創立の裏話』

座談会　日本金属学会会報　第3巻(1964)第2号　104～109頁

案内人　名古屋大学　山本剛久

“日本金属学会創立の裏話”という記事は，金属学会が創立されて25年後の1964年に掲載されています．現在から遡って約55年以上も前の記事になりますね．筆者はまだこの世に生を受けた直後であり，全く想像もつかない大昔となります．ちょうど日本が高度成長期に入り，東京オリンピックが開催されたのが1964年，その前年には東海道新幹線が開通しています．ちなみに，開通当時の新幹線は，東京―新大阪間を4時間で結んでいました．今は，のぞみを使って2時間40分ですね．本誌も「まてりあ」という名称は用いられておらず，「日本金属学会会報」というストレートな名称で当時の会員の手元に届けられていました．さて，タイトルにある通り，この記事は金属学会が創立されるまでの裏話を当時を知る関係者(記事が掲載された時点から25年前ということですね)が集まり，座談会形式で語った内容がまとめられています．非常に興味深い話を聞くことができます．記事が掲載されたのは，金属学会が創立されて25年目という節目に掲載されています．当時も編集委員会があったことと思いますが，その委員会でこの座談会が企画されたのでしょうか．この記事は座談会形式ですから会話調の内容が続きます．冒頭に，“25年前の生きた歴史の方々が，わざわざお集まりくださいまして，ありがとうございます”という司会の方の言葉で始まっているのが，なんともほほえましく感じられます．この記事が掲載された時点で，すでに金属学会創立を懐かしむ時であったのだろうと思います．会話の節々にその雰囲気が現れています．創立から25年ですから創立当時に活躍されていたであろう先生がご逝去されている内容なども出てきます．読み進んでいきますと，日本鉱業会という学会が工学関係の学会でもっとも古い学会らしく，機械学会や電気学会はこの日本鉱業会から分岐して設立されてきた，というような話も出てきます．また，創立が簡単に進んだわけではなく，紆余曲折があったことが伺えます．おそらくこの経緯を知っている先生の提案が，この記事を組む切っ掛けとなったのではないかな，とも想像されます．全部で6頁の記事なので内容の面白さも加えて，一気に読み進めることができます．もし，この座談会に参加されている先生方のご関係者がこの記事を読むと，その当時の情景が蘇ることと思います．そんな読者の方もいらっしゃるのではないでしょうか．この機会に，ぜひ，ご一読を！

(2019年3月10日受理)[doi:10.2320/materia.60.41]



座談会

日本金属学会創立の裏話

<出席者>

明治大学教授 元副会長	石田四郎	
東北大学名誉教授 元会長，名誉員	岩瀬慶三	
理化学研究所名誉研究員 東海大学教授 元理事，名誉員	黒田正夫	
鈴木金属研究所所長 元理事，名誉員	鈴木益広	
東京工業大学名誉教授 武蔵工業大学学長 元会長，名誉員	山田良之助	司会
日本金属学会主事	飯坂新太郎	

鈴木　25年前の生きた歴史の方々が，わざわざお集り下さいまして，ありがとうございました．ことに，岩瀬先生には，はるばる京都からご足労下さいまして非常にありがたく，お礼を申上げます．また仙台の学会事務所からは飯坂主事がおいで下さいました．これまた厚くお礼を申上げます．

まづ座談会の司会を山田先生にお願いしたいと思います．(一同賛成)

司会　日本金属学会が発足して25年たちました．これを記念して当時の思い出話をというので，鈴木先生のご配慮によりまして，関係の深い先生方にお集りいただいて，この会ができましたことは誠に喜ばしく存じます．このようにして記録をとどめておくのも，学会のために大変結構と思いますし，恐らくこれが最初で最後の会合になるかも知れない．当時の関係の深い先生では，本多先生や，後藤先生はすでに亡くなつておる．……今日は時間の許される限り，いろいろお話合いをいただきたいと思います．

そこで日本金属学会は昭和12年に発足したんでありますけれども，その前から金研では「金属の研究」を月刊で出しておられる．たしかあれは大正13年からであつたかと思います．それからここにご出席の石田先生，黒田先生，あるいはその同学の方々の間にも金属に関する学会を設立しようじやないかというお考えがあり，相当長い間計画を練つておられたと承つておりました．そういうのがお互いに話し合つて，日本金属学会を作ろうというところまでゆくのに，世間に知られていない裏話がある．その裏話を隠すことなくぶちまけて話合つて記録に残しておいたらいいのじやないかと思います．

昭和12年に日本金属学会が発足する，その前と，発足した後の思い出話をお願いすればいいのではなかろうか．

実は，黒田先生，石田先生，あるいはその同学の方々，いづれあとでお名前も出ると思いますけれども，東京の方でご計画になつておつたその話と，仙台の方へそのご計画を持込まれ，鈴木先生と私とが，その連絡係をつとめたというようなことで，共通の話題になるわけでありますが，その前の頃からのお話をいただきたいと思います．

石田　後藤正治先生を中心にして，「合金」という機関誌を金属工業談話会で出しておりましたが，その会ができたのが昭和5年ですね．はじめは隔月にだしておつたが，何しろあまりオリヂナルな論文がでるわけではないので，欧米の論文の抜萃を2/3くらいいれて，あとオリヂナルをいれる．ねばつてやつていたのですけれど，せいぜい150人か200人の同人雑誌みたいなものでしたね．だんだん年月はたつていくのですが，あまり発展もせず昭和11年ころまで，そんな経過をたどつていたわけです．11年になつて，こんなに細々とやつていてもしようがないから，何とかして非鉄のインスチチュート・オブ・メタルズのようなものを作つてみたらどうかというので，記録によると，3月ころから何回かその問題を検討する会合をもつたようです．

黒田　それの幹事をしているのがいまの自動車技術会の吉城肇蔚君ですよ．

司会　それにわれわれの承つておつたのは，堀口貞雄君，伊藤宗男君……

黒田　東海鉛の堀君，それから阪大の山口珪次．

司会　要するに大正11年，東大冶金の製造冶金，つまり後藤先生の第1回のお弟子さんを中心にした集りであつた．

黒田　それが「合金」という同人雑誌をだした．表紙は多分吉城君だね．タタラブキの木版をもつて表紙とした．その複写を飯坂君に頼んで学会誌に載せてもらいたいね．

鈴木　私が思い出すのは，昭和11年だつたか，研友会

の講習会のあと，横浜磯子の偕楽園だつたと思いますが，そこで懇親会をやつた．会のあと，石田さんが私をつかまえて，こういう学会を作りたいがどうかという話．それで，この学会を作るにつきまして，私は石田さんのお話を承つて，山田先生にご相談申上げたと記憶しますが…….

司会　そうですね，しかも，その話は，当時日本鉄鋼協会の「鉄と鋼」に非鉄金属，合金の論文をのせるチャンスがあまり多くない．それで先程ご説明があつたように，英国にも鉄，鋼と非鉄との学会があつて互いに盛んにやつている．日本でも非鉄金属の学会を作ろうじやないかというご提案であつて，仙台の方へこの意志を通じてくれないか，ということであつたわけです．それでわれわれは仙台の岩瀬先生にご連絡申上げた．

岩瀬　私として記憶しているのは，なにか，本多先生の記念事業の中に学会を作るようなことがうたつてあつたような気がするんです．

司会　その記念事業というのはご在職25年の？

黒田　早さの問題からいつたら，石田君がそのときに鈴木君達にいつたのと，僕が雪かなんかの関係で北海道に行つた帰りに仙台に立寄つて岩瀬君にいつたのと，どつちが先だろう．この方が先じやないかな．皆に怒られたんだよ．余計なことをしやべるといつて．

司会　何れにしても，東京のグループでは，全国的に発展した会を作ろうという話があつて，仙台ともひとつ相談しようという内輪話があつたんですね．

石田　もちろんそれはあつたです．

黒田　僕が後藤さんに全国的にするためには，仙台の本多先生と，京都の斎藤先生と西村先生のところへ，おれたちで，旅費をもつて行こうじやないかと，後藤さんにいつたことがある．ところが先生動かない．非常に慎重だものね．それでつい石田君が君にいつたり，僕が岩瀬君にいつたようなことになつたと思うんだ．

石田　私は最近当時のメモをくつていたんだが，鈴木さんにステーションホテルでお会いして，講習会の打合せをやつたことや，あなたが駒場の研究室においでになつたことも書いてありますよ．3月と書いてある．講習会は3月…….

鈴木　夏だつたと思います．

司会　それは講師の依頼に行かれた．石田さんが当時研友会のメンバーであつたかどうかははつきりしないが．

石田　いやメンバーです．私は昭和3年から5年くらいまで，マグネシウムの研究の関係で仙台の嘱託をしていたんです．それで仙台には年1,2回は行つておるんです．

司会　ところで，「合金」の方々が仙台と京都とに連絡して全国的の学会にしようとして，まず接触を保たれたのが第一に仙台であつたわけですね．

岩瀬　そのとき高橋清君が……

石田　あれは余程あとでしよう．はじめにご両氏に連絡したので……

岩瀬　仙台ではそのころ「金属の研究」を発行しておつたから，あれを供出するということになる．

石田　そうですね．私どもは「合金」を出す．そして両方を合併しよう．私どもはそこまで考える前に，東京付近の先輩，知人を説いて廻つた．後藤先生のお供をして2,3の先輩をお訪ねしたことがありますよ．当時のメモによると，日本鉱業会は年に一体どれだけの金を使つているか，設立の当初はどうなつているかなども調査しています．

黒田　日本鉱業会は工学関係の学会の一番古いものなんだよ．機械学会も電気学会もここから分れている．

岩瀬　非鉄の論文は鉱業会誌に載つておつた．

石田　私どもそのころの論文は80%は日本鉱業会誌に出しております．あとの一部が鉄鋼協会ですが，春秋の講演大会などにもなかなか出しにくい．いまでも覚えていますが，八幡での講演大会で，非鉄は私1人ぐらいしかなかつたこともある．

鈴木　そうしますと，岩瀬先生は，石田先生からの提案を知らされたとき，すぐ賛成されましたか．

岩瀬　仙台では，本多先生のご意向が大きいわけですから，石原(寅)教授らと一緒におそらくそういう話を本多先生にしたんじやないかと思います．

司会　とにかく，仙台としてのご返事は，賛成で，しかも「金属の研究」をやめて合流しようということでしたね．

岩瀬　私の考えとしては，「金属の研究」は一種の同人雑誌であつて，仙台で固まつている．相当の購読者もあつて盛んにやつているけれども，仙台一色ではいけない．金属材料研究所というものが素ッ裸になつて，学界の中に入つていく必要があのじやないか．このような考えをもつたわけです．

司会　東京側の提案を仙台ではあまり反対もなく，割合早く賛成ということになりましたか．

岩瀬　なにもトラブルはなかつた．本多先生としては理論的に鉄の方をやつて来られたものですから，こういう学会をおつくりになるというご意向があつたのじやないかという気がします．

司会　まあそういうことで，あとは仙台の意向を代弁するのが鈴木先生と私ということになつて，石田，黒田，堀口，伊藤，吉城君と交渉がはじまつたわけです．その

辺のことを石田先生や黒田先生から……

石田　何回か顔を合せてはご相談申上げた．定款もどのようにしようなどと案をお持ちになつて拝見しましたね．あなたの方は機械学会のを参考にして研究しておられましたね．

司会　それで度々お会いしているうちに，最後に話がうまくゆかなくなつたわけですが，なぜ決裂したかというと，本部を東京にしようというのと，いや，仙台にすべしということにあつたんじやないですか．

岩瀬　それだけのことですね．

司会　仙台は雑誌の編集には経験もあるから，本部を仙台において，そして雑誌の編集もしようという．ところが，およそ学会の本部というのが，東京以外にあることは考えられない，本部は東京に置きたいという．こういう話と，会長は本多先生，副会長は後藤先生，こういう下話もありましたね．

岩瀬　それはあつたですけれども，私の記憶ですと，やつぱり会長には任期があるわけで，その任期が来たらバトンを後藤先生に渡されるかどうか，僕らが聞いてもはつきりいわれない．だからそのままお伝えしたような気がするんですけどね．

黒田　そこらが決裂の原因じやないかな．

岩瀬　僕はそう思うんだけど……

石田　いや．本部というか，事務所の場所のほうが主体でしたよ．

岩瀬　事務所のほうは，「金属の研究」を投げ出すんですから，本部はどうしても仙台ということは，非常に強かつたんですよ．

鈴木　そういうことですね．「金属の研究」を廃刊してまでやるんだから，本部は仙台に置きたいということだつた．

司会　それについては東京のほうに異論があつた．

石田　最後まで賛成しなかつた．

黒田　いまだに賛成できない(笑)．日本的な大きな学会で，東京以外に本部があるのは金属学会だけだよ．

石田　われわれとしては，あれだけの研究所を持つておられるし，あれだけの雑誌も出しておられるんですから，本部を仙台ということはごもつともだと思うんです．しかし，われわれとしては，昭和5年から細々ながら11年まで「合金」を続けて出しているんです．それをつぶしてしまうというわけで，そうすると何人かが納得したつて，グループとしては他に相当数の人がいるんですから，これを納得させることはなかなか難しい．そんなわけで妥協点が出て来なかつた．

鈴木　そういうことですね．

司会　簡単に話が決裂したんじやなくて，それこそ何回かお会いして，2時間，3時間と議論を重ねたんだけれども，結局やめようということになつたんだから，その間，本部問題以外にいろいろ意見の一致していた点もあるし……．

石田　決裂直前のことをいうと，本多先生が，学術的の会議か何かの関係で，東大航空研究所を見に来られたことがあるんですよ．その当時の学界の大御所が3人ばかり来られた．そのとき後藤先生に来ていただいて説明役をお願いしました．このようにして本多先生と後藤先生とが直接お話をされるチャンスを作りました．そこで大体話がまとまつたと私は思つおつたんですよ．そこまで運んだんですが，その直後に決裂したんです．

岩瀬　私はあまり石田さん達とお目にかかつておらないんですけど，やつぱりご一緒のこともあつて，その席上では石田さん達のおつしやる通りにこちらも賛成して，仙台に帰つて本多先生に話してみる．そうすると，うんといわれないので，私たちとして石田さん達にどうも具合が悪いというような気がしていたんです．実際今日はそれを大いに釈明したいと思うくらいですよ．

黒田　要するに仙台は本多先生の親方的統制，東京はわれわれの民主的ゆき方で，結局仙台の力に負けたという感じを僕は今でももつている．

司会　それで決裂の場面になるんですが，私は当時三ノ橋の夜学を教えにいつていた．大てい9時すぎに終るのです．

黒田　つまりいまの法政の工学部ですね．

司会　ところが黒田先生から電話があつて，夜学を終つたら会おうという話．学会設立のお話だというので銀座までいつた．実は私の推測では，黒田さんが何か妥協の方策でも相談されるのかなと，想像していつた．ところが，黒田さんばかりでなしに，石田先生や堀口，伊藤の各氏も見えた．呼び出した張本人の黒田先生は一言もいわずに，壁にもたれて寝てしまつた(笑)．そして私は石田さんと主として話をして，話は結局平行線で，意見は一致しないから，打ち切りましようか．どちらからいい出すとなしにお互いになごやかなうちに打ち切りを確認し合つた．黒田先生は居眠りのふりをしておつたけど，聞いておつたでしようか(笑)．そういうことがありましたよ．

黒田　実はこつちの方をもう妥協せしめる余地はなかつたんです．僕つて男は一体に喧嘩早いといわれるんだけど，自分としては非常に妥協的な人間のつもりだが……．

岩瀬　何回位お会いいただいたのかな．

司会　5回や10回じやないでしよう．

石田　その間に最終的には高橋清さんが顔を出しまし

たよ．

司会　決裂の席上，石田先生から打ち切りになつて，仙台はどうするだろうという話が出まして，その時，話したのは，仙台はすでに「金属の研究」を廃刊してやろうという決心をしたんだから，恐らく今度は仙台のほうがイニシアティブをとつて，全国的に呼びかけてやるじやないかと思うということ申上げました．すぐ岩瀬先生のところへお知らせしたが，結局仙台のほうからそういうご意向が出て来たわけです．

岩瀬　あれは本多先生のところに直接いつたんでなかつたでしようか．

司会　岩瀬先生でなかつたですか．

岩瀬　本多先生が手紙を持つていらして，こうこうなつたから，今度はこつちでやるから向うへ援助をお願いしよう．

鈴木　後藤先生に副会長になつていただきたいと，山田先生と私とが5度ばかりお訪ねしました．

石田　私どもは金属学会が発足した直後に後藤先生が副会長になつていないことを初めて知つたわけです．先生はご自由に参加下さいとわれわれ，弟子どもは申上げたんですよ．われわれとしては「合金」のもとに集つた仲間の不賛成をどうすることもできないが，先生はそれとは無関係に行動していただきたいと申していたわけです．先生はいかになんでも自分だけ勝手には動けないというので遠慮されたわけでしよう．これは推測ですが，それが真相らしい．

司会　会長は本多先生，副会長は後藤先生と京都の西村先生ということが予定されておつたが，後藤先生がなかなかご承諾にならないもんだから，急に真島先生に無理にお願い申上げたような次第です．

岩瀬　決裂のお話があつたときに，私らも困つたと思つたわけですよ．ところが本多先生はもう1回妥協の話をせよといわれるかと思つたが，そうじやなくて後藤先生なしでもやろうという考えをもつておられたのじやないかという気がした．

司会　その当時，本多先生は東京へおいでになると山王ホテルを宿にしておられた．鈴木先生などよく山王ホテルで先生と連絡された．その当時私も先生に何か書いて下さいといつたら，たやすく引受けて下さつて，「細大洩さず」とか「熟慮断行」とかを書いていただいた．昭和11年夏と書いてある．

鈴木　「熟慮断行」は私もいただいた．型破りの書き方で「贈鈴木君」とあつた．

司会　金属学会の構想としては，ノンフェラスとともに，鉄鋼に関する理論も入れようということであつた．

岩瀬　石田さんとご相談のときは……．

石田　それは入つておりましたよ．鉄鋼協会が日本鉱業会から独立して10何年しかたつていない．その関係からでもインスチチュート・オブ・メタルズにするつもりでおつたんですね．

黒田　後藤先生は昭和13年に亡くなつているんですよ．

石田　そのとき私どもは先生は金属学会の何か役員をしていらつしやると思つた．ところがそうじやなかつた．それにも拘らず鈴木さんが金属学会をプライベートに代表されて丁重にお葬式にお見えになりました．私はさすがに鈴木さんは長い交渉をなさつたあげくだから，ちやんと義理がたくお見え下さつたと思いましたよ．今でもそれは感激しております．

黒田　当時われわれは30代だね．

司会　そこで皆さんははじめから会員で……

石田　私は2年位入つてないんですよ．

黒田　僕だけでなく他の連中も随分長く入らなかつたね．

司会　三島さんは……

石田　三島さんは私どものこの金属学会の相談には何もタッチしていない．ですからわれわれのグループには義理も何もないんですよ．

司会　それで発足当時の理事で東大の関係の方が割合少なかつた，陸海軍の研究所長などは入つておられたが．

鈴木　多田陸軍中将，日高海軍中将，吉川晴十先生がもと海軍少将，あとは真島先生，山田先生，僕，それから今の東芝，当時の東京電気社長の山口喜三郎さん．この7人がステーションホテルで理事会をやつておつたのです．

司会　それで鈴木先生からお話していただきたいと思つていたんだが，発足して間もない理事会の席上で，山口さんが私ども2人に，ご両所は若いが，如才ないだろうと思うんだけれども，全国的であるべきこの日本金属学会に，東大の先生が役員に入つておらんのは誠に残念だから，そういうことのないように考えられたい．こういうことを承りました．勿論それは気になつていることなので，できるだけ早く皆さん方役員にお入りいただくようにいたしましようと申上げまして，岩瀬先生や皆さんと相談をして，一番最初に理事に入つていただいたのが石田先生でしたかね．

石田　そうかも知れません．入会したのは後藤先生が亡くなつて1年位たつてからでしたから……．

司会　まづ東京の事務所を鉄道技術研究所の鈴木先生のところにおいた．その後理研の真島先生の研究室にお願いしたころは，黒田先生は役員になつておられた．

鈴木　それは戦争のまつ最中…….

黒田　理研で真島研究室にお世話になつていたから，真島先生の秘書として入つたんです．

飯坂　昭和17年ですね．黒田先生がはじめて理事になられたのは．定款を16人の理事を26人に改めたときです．石田先生の理事もやはり同年です．

司会　本多先生は学会の発会式の計画については，なかなか派手なところがあつて，祝辞も多かつたですね．

鈴木　祝辞は，大臣では文部，商工，海軍，逓信，鉄道，陸軍，その他，工学会，鉄鋼協会，火兵学会，機械学会，工業化学会，電気通信学会，材料研究会，化学機械協会，数物学会，溶接協会，鋳物協会，建築学会，精機協会，日刊工業新聞，テーブルスピーチでは長岡平太郎，俵　国一，河村　暁，水谷叔彦の各氏ですから，大変なものでした．

司会　多分発足の当初からと思うけれども，本部は仙台だが，東京も本部の一つであるということにして，日本金属学会東京事務所と呼ぶことになりまして，それが今日まであるんじやないでしようか．

黒田　戦争中は東京事務所はどこにあつた？

鈴木　鉄道の研究所から，浅草の柳橋の上流の安田徳治氏の金属会館に移つた．

岩瀬　東京は事務所といつたけれど，仙台はただ本部といつていた．

司会　その後真島先生のおられた理研でお世話願つた．

黒田　その後東大の五弓君の室でお願いすることになつた．

司会　五弓氏が評議員とか理事であつても，なくても，あそこでお世話願つたんです．役員がかわる度に事務所がかわるのは会員に対してよくないし，かたがた，東大の冶金教室に事務所があるのはよいことだとも思うもんだから，五弓氏には長い間大変御迷惑であつたと思うが，お世話願つたような次第です．

岩瀬　長い間よくやつて下さつた．

黒田　10年位ですよ．

司会　仙台では雑誌の編集とか，庶務的なご苦心があつたでしよう．

岩瀬　事務ははじめは鈴木広治君で，その後飯坂君になつた．

鈴木　鈴木広治君は，物理教室の助手だつたんです．

岩瀬　飯坂君のあと東北大の法文を出た大村君もはいつた．そして東京では遠藤さんに仕事をお願いした．

岩瀬　編集のことだけれど「金属の研究」を長くやつていた経験があるから，その方の苦労はあまりなかつた．原稿もよく集つた．

飯坂　創刊号はいまの東北印刷，その後は笹気印刷とかいろいろ変りました．終戦の際に印刷所が全滅しましたから，何しろ緊急を要することなので，私共のすぐ隣に職場を作りまして，地下室が幸い，ガスや水道が利用できたので，活字の鋳造機を置いて，辛うじて運転をしたという時期がございました．これは終戦直後の話ですが，仙台市内には印刷所が全然ありませんので，雑誌を作るためには，岩手県の田舎で印刷をしたり，東京で印刷したり，大分苦労しました．

司会　会誌は四六判にしようか大判にしようか，いろいろ議論がありましたね．

飯坂　創刊当時はA 4 判という大判でしたね，それが長く続いた．

岩瀬　会誌の大きさについては東京の鈴木，山田両氏にまかせたような形で，仙台では，本多先生は，会員を1万人にせよということを強力におしてこられたんですね．

鈴木　東北大学の50年史に，何か間違つたことが書いてあるんじやないですか．

飯坂　あの記事は間違いと思いますね．本多先生の寄附で学会が創立されたというふうになつている．

鈴木　こういうふうになつているんですよ．先生の在職25年記念会の寄附金の一部を設立準備金に当て，金属材料研究所が中心になつて金属学会が創立されたということになつている．この記念会の一部の金というか，本多先生の寄附というか，1万円は，学会ができてから後の金属学会賞の基金になつているんです．

飯坂　私の知つている範囲では，創立以前の経費というのが記録がないことですね．私ははじめから手をつけましたからよく知つております．

司会　創立以前の各種会合費などはほとんど鈴木さんの私費を使つたのが真相です．学会が正式に成立するまで，実に度々会合しているんです．それは東京だけでもそうだし，仙台から本多先生その他の先生方が来られて，学会創立の打合せをしたのは実に数多くありますが，これは鈴木さんが支弁しておられたのが真相です．

黒田　そういえば「合金」も全部自腹です．

石田　印刷費など，年末のボーナスで出しあつた．

岩瀬　先程からいろいろお話があつたように，金属の理論方面を強化しなくてはいかんということで，皆若かつたから，がむしやらにやつて来た，仕事面では鉄鋼協会と重複はしないけれども，鉄鋼協会にもある程度刺激となつたわけで，結果としてはよかつたと思うんです．

司会　黒田，石田両先生の方で「合金」をやられたり金属学会が発足したり，ということは結局，学問が発達しつつある時代の趨勢として，学会も分科してゆくのが

自然の勢であつたといえましよう．

黒田　“光陰矢の如し”というけどもう25年以上たつてしまつた．

岩瀬　「金属の研究」をはじめたころは関係者は30才位でした．印刷屋では校了したあとで枠をはめるんですが，その時叩くと活字がとぶ，いい加減に拾つてはめる．ですから校了のときよかつたのが，刷上つて見るとちがつている．こんなことがあつた．

司会　発足当時の会費はいくらで……

飯坂　たしか8円，切手は当時3銭，年間の予算は3万5千円でした．

司会　会員数は？

飯坂　3434名，最近は1万数百名．

黒田　創刊号が3000部も出たんですか．

飯坂　そうです．

黒田　とにかく本多先生はえらいもので，弟子を可愛がつてね．それで至るところに弟子をおいてあるから，先生が一言いうと，すつと集つてくるんだからね．

司会　それでは学会成立後の経過の中でお話いただくことは……．

黒田　戦後のことで非常に印象的なのは，小平氏が会長のときの神戸での演説は，自分が会長をしている間に何とか金属学会と鉄鋼協会をうまくまとめて見たいといいましたね．それができないで彼は死にましたけれど……．

岩瀬　小平会長は，東京の方にも，仙台の方にもお話があり，私からも頼んでおりました．

司会　今はそういう話はないですか．

飯坂　最近では欧文誌を出しましたね．あれを出すについて，何とか両会を一本にして出したいということを伊藤隆吉会長がいわれて，両方で懇談しましたが，うまく参りませんでした．

黒田　僕は金属学会と鉄協会の講演会を一緒にしようとして，僕の理事のときに2,3回やつて，その後少い続いたけれど，こごろじや併立してやつているね．

岩瀬　学会が発展するにはスポンサーが必要になる．

黒田　鉄鋼協会には鉄鋼聯盟があるが，金属学会は金属一般の理論と，非鉄金属の精錬加工など，非鉄系統の学問技術を取入れなくてはいけませんね．

司会　毎年春秋の総会での論文の数は多いでしよう．論文の数が多いが日数を無暗にふやす訳にはいかない．勢い講演時間が短くていけませんね．そこでB講演のようなものを多くする必要はないですか．

黒田　今のお話とは別になるが，春秋2回の総会の講演会をやめて，分科会を毎月開いて，学問的にもよく検討し，討論も，もう少し多くしてはどうか．春秋2回の大会は懇親的な意味をもたしたものだけとしてはどうかね．

岩瀬　結局今の御意見に賛成で……，学会としては小さい例会を年に何回か，あつちこつちで開き，総会式のものは総会講演のようなものでやつていく．

飯坂　この辺のことは学会としては今検討を重ねています．なお，10年も前から岩瀬先生がいわれておつたことだけれども，金属に関する学問が分科され，それに伴つて，それぞれ，学会ができてゆく．このようにして参りますと，金属学会はそれらを傘下にもつ傘のような役割を果すことになると思われます．

司会　その辺のところは歴代の役員の方々に篤とお考えいただきたいところですね．

書　評

溶融塩物性表　電気化学協会溶融塩委員会編：溶融塩電解，金属精錬，珪酸塩工業など高温化学反応を利用する工業では，溶融状態にある塩類や酸化物の諸物性に関する正確な数値がぜひとも必要であるが，最近原子炉，稀有金属，超耐熱耐食金属および高純度金属などの材料の研究，ならびに製造が発展するにつれて溶融塩の諸物性は重要性を増すばかりである．本書は電気化学協会溶融塩委員会が，数年間調査検討を重ねてえられた苦心の結晶であつて，内容はまことに明解鮮明である．

Ⅰ.物性表　1.単極電位，2.分解電圧，3.電気伝導度，4.粘度，5.密度，6.表面張力，7.蒸気圧，8.拡散係数，9.腐食，Ⅱ.状態図，1.ハロゲン化物系，2.酸化物および炭化物系2酸化物および炭化物系2成分系から4成分系にわたり，164葉の状態図が掲載されている．Ⅲ.測定法，1.単極電位，2.分解電圧，3.電気伝導度，4.熱伝導度，5.密度，6.粘度，7.表面張力，8.蒸気圧，9.拡散係数，10.腐食，11.相平衡，12.温度．各物性を測定する方法ならびに手段が具体的に説明されている．

本書は単なる物性表ではなく，全般にわたつて文献があげられており，溶融塩研究のみでなく，ひろく高温化学研究の得がたきすぐれた指導書である．

（A5版，本文700頁，**定価2,500円**，化学同人出版）

(S.S.)